

お正月

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー
張江 幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。
このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

【1】はやくこいこいお正月

もういくつねると お正月
お正月には 凧あげて
こまをまわして 遊びましょう
はやく来い来い お正月

もういくつねると お正月
お正月には まりついて
おいばねついて 遊びましょう
はやく来い来い お正月

この歌は明治 34 年の「幼稚園唱歌」にのっていますが、明治、大正、昭和、平成と歌い継がれてきました。子どもたちが、やがて来るお正月に、色々な期待や夢を載せて歌ったものです。

このお正月は、いまではクリスマスにお株を奪われてしまいましたが、日本の各地では祖先から引き継いだお正月の慣習を守っています。

分かっているようで、正確には覚えていなかった正月にかかわる行事や言葉を、もう一度見直しませんか。

去年（こぞ）今年（ことし）貫く棒の如きもの
高浜虚子

【2】神様をお迎える

古来日本人には、八百万（やおよろず）の神。日本の神様はどこにでも宿っていて、節供や祭りの日には私たちの生活空間に降りてきてくださる。

お正月は、元旦〔正月の朝〕にお歳神様をお迎えして、今年の豊作と平穏に感謝し、新しい年の豊穰と平安を記念する行事です。

- (1) 注連縄（しめなわ）は、占める、つまり占有する意味で、不浄のものの侵入を禁ずる印です。お正月には玄関や家中に注連縄を廻らせて、いつもの暮らしの空間が神様をお招きする舞台になります。
- (2) 門松は、お歳神様が我が家に降りてくださる時の目印です。左右に一對に並べ、玄関に向かって左の松が雄松、右の松を雌松と呼びます。松は古くから神が宿ると考えられた聖木。さらに真っ直ぐに伸びた長い節が長寿を表わすとして竹を添えました。
- (3) お供え・お飾り このほかに、日頃から家の中の様々な場所

に神様はおられると考えています。神棚には伊勢神宮、祖先神。台所には火伏せの神。便所には廁（かわや）神とか、雪隠（せっちん）神と呼ばれるトイレの神様がいます。そこで、正月には日頃の感謝を込めて、台所や便所にも松の枝や鏡餅を供えます。子どもたちは其処此処に神様へのお供え飾りを手伝わされて、神様の存在を学んだのです。

- (4) 鏡餅 古くは餅鏡といって、神霊の宿る神聖な鏡にたとえたり、生命の源である心臓をかたちどったものとも、望月のモチであるともいわれています。金沢では紅白の二つ重ねで、紅は太陽を、白は月を表徴するとしています。
- (5) 鏡開き・鏡割り 正月11日に、お歳神に供えた鏡餅をおろして食べます。このとき刃物を使うのは不吉であるとして、手や槌を用いました。
- (6) 節供・節句 自然の変化と共に訪れる神様と人々が、時間と場所を決めて出あい、酒食を共にするのが節供です。江戸時代には、五節供を祭日としていました。一月一日は元旦、三月三日は上巳（じょうし）〔ひな祭り〕、五月五日は端午、七月七日は七夕（しちせき）、九月九日は重陽です。

新年の白紙綴じたる句帖かな 正岡子規

【3】おせち料理

御節供（おせちく）料理の中でも、一年の豊穰と平安を祈る最もめでたい日と考えられて、明治以降は元旦の料理のみをおせち料理とよぶようになりました。古くは膳に盛ったものですが、正月には女性にも料理などの手間をかけさせないように、重箱につめるようになりました。これを組重と呼びます。四段重ねが主流ですが、それは完全を表わす数字の三に更に一つ重ねて祝いの気持ちを表しています。

- ① 一の重には祝い肴である三つ肴と口取り。関東では黒豆、数の子、ごまめ。関西ではごまめの代わりにたたき牛蒡が入ります。
- 1、三つ肴 黒豆はマメに暮らせませうように、マメに働きますようにという願い。
- 2、数の子は沢山の卵を抱える鯨にあやかっ、子宝に恵まれ、子孫代々繁栄しますようにという願い。
- 3、片口鯛の稚魚を干したゴマメは五万米が語源。高級肥料であった鯛を田植え時に撒くと五万俵ものコメが採れたという由来から来ています。田作りとも呼ばれ、小さくとも尾頭